（１）人丸神社と細川幽斎

関が原の合戦以降のことであろうか、隠居の身の細川幽斎は、海路明石に到着し、たった一人で人丸神社（この頃の人丸神社には、元和に築城された明石城の場所に鎮座）に参詣したことがあった。神前には多くの人々が集まり、それぞれに歌を詠んでいた。その中の一人が、めざとく幽斎を見つけて、「人丸様にお参りした者は、歌を詠んで手向けとするのが慣わしです。あなたも一首お詠みなさい」といって、皆が詠んだ紙を取り出して、「あなたもこれへお書きなさい」としきりに勧められ、幽斎は閉口して、「いや、私は、歌のことは一向知らないものですから」と言葉を濁して辞退したが、連中は納得せず。やむをえず、ほのぼのと明石の浦の朝霧に」と詠み出したところ、人々は、それは人麻呂の歌ではないか、と失望の色が見えた。幽斎は委細構わず、「その朝霧の次に、と、と加えてください。そして、その次に、よみし翁はこの苔の下、として下さい」こういい終って、さっさと人丸山をあとにした。

ほのぼのと明石の浦の朝霧と詠みし翁はこの苔の下

あまりの見事さに、一同顔を見合せて驚く事、驚く事。これは只者ではないと、船着場まで追いかけていき、そのご仁が細川幽斎公だとわかり、一同あらためて赤面したという（桑田忠親著『細川幽斎』）。この頃には、歌の神様であることが人口に膾炙していたのであろう。

日本歴史学会会員　　茨木　一成

柿本神社